様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：22700607
研究課題名（和文）周縁アスリートの社会学的ライフストーリー研究

研究課題名（英文） Socio-analysis on Marginal Athletes: From the Life Story Approach

研究代表者
石岡 丈昇（ISHIOKA TOMONORI）
北海道大学・大学院教育学研究院・助教
研究者番号：10515472

研究成果の概要（和文）：フィリピンのボクサーのライフストーリー分析より、ボクシングマーケットにおける「敗者の生産」の国際分業の仕組みが明らかになった。また、そのなかで「敗者」であることを受け入れるフィリピンのローカルボクサーの論理も明らかになった。政治経済分析のみならず、性向の分析を取り込んで、グローバリゼーションの時代における周縁アスリートの生活を論じたことに独創性がある。これらの成果は、単著『ローカルボクサーと貧困世界―マニラのボクシングジムにみる身体文化』（世界思想社、2012 年、全 358 頁）にまとめた。

研究成果の概要（英文）：Through life-story analyses of nameless Filipino pugilists, this research elucidated the mechanism of new international division of Sport labour. “Social production of losers” is a key concept to make deep inroads into the principles. This research also illuminated the social logic of the pugilists to accept their role expecting to lose. These outcomes are described in my ethnographic book, *Local boxer to Hinkong sekai*, published in 2012 by Sekai Shisousya.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1000000	300000	1300000
2011 年度	800000	240000	1040000
2012 年度	900000	270000	1170000
年度			
年度			
総　計	2700000	810000	3510000

研究分野：スポーツ科学
科研費の分科・細目：スポーツ社会学
キーワード：ライフストーリー、周縁アスリート、貧困世界

１．研究開始当初の背景

日本のスポーツ社会学は、その前景を成す体育社会学の問題構制を引き継ぎながら、戦後より社会体育論、コミュニティスポーツ論、総合型地域スポーツ論、スポーツ公共性論へと研究関心を移行してきた。それは一方で、戦後民主化（社会体育）、高度経済成長期における地域創造（コミュニティスポーツ）、「失われた 10 年」の只中での地域計画（総合型地域スポーツ）、新自由主義レジームに対する公的部門再生（スポーツ公共性）と、マクロな政治社会変動と相即した研究パラダイムの創出過程であったと言える。

しかしながら、そこでは奇妙にも、スポーツ界の最たる担い手であるアスリートの研究はつねに斥けられ続けた。それは、上述の地域スポーツ研究とは別の理論的賭金の下に研究展開した企業スポーツ研究の著作に

おいても同様である。地域スポーツ研究では、スポーツの物的基盤について様々に語られる一方で、そこでの具体的なスポーツ実践の意味については研究が完全に空白化したままである。また、企業スポーツ研究においても、企業スポーツの財政基盤やその歴史的発展過程が論じられる一方で、アスリートのリアリティは切り捨てられてきた。このような「アスリート不在のスポーツ社会学」が自己展開するに至ったのは、次の二点が関係する。第一に、アスリートのインテンシブな調査を試みることが容易ではない点がある(対象選択のエコノミーの問題)。 そしてより重要なこととして第二に、アスリートのリアリティから社会学的思考を立ち上げる方法的見解を学界が持ち得なかった点がある。こうした学界趨勢を乗り越えるために、本研究はアスリートのリアリティそのものに照準した〈アスリートセンタード・アプローチ〉を引っ提げ、そこから現代スポーツシステムの再考を試みるものである。そのために本研究では、ライフストーリー研究を用いる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、社会学的ライフストーリー研究の方法を用いて周縁アスリートのリアリティの再構成をおこない、そこから現代スポーツシステムの社会的特性を明らかにすることである。ここで周縁アスリートとは、スポーツシステム内において、その中核から構造的に排除される層のアスリートを指す。この周縁アスリートに注目することによって、現代スポーツシステムに内在する本来的な不平等性が解明可能となる。さらに、現代スポーツシステムが周縁アスリートと共犯関係にあることを提示する。

3. 研究の方法

本研究は上記の課題を、フィリピン・マニラ首都圏のボクサーの事例より検討を加えるものである。なぜ、マニラ首都圏のボクサーを対象とするのかと言うと、フィリピンのボクサーを「咬ませ犬」とすることで、日本のプロボクサーは自身のキャリア形成を達成することが慣例化しているからである。

具体的数字を挙げれば、たとえば 1996 年には 151 試合でフィリピンボクサーが日本のリングに上がり、戦績はフィリピン側から見て 11 勝 133 敗 7 分であった。つまり、日本のスターボクサーを作り出すための 生贄として、フィリピンボクサーが位置づいていることがわかる。このようにスポーツ界では「敗者の生産」が恒常的におこなわれている。本研究はこの「敗者の生産」機制こそを現代スポーツシステムの社会的特性として抽出し、社会学的分析を加えるものである。 その上で、本研究の方法的特徴は、周縁アスリート自身の視座を解明することに照準している点にある。つまり、スポーツシステムの周縁層に位置づくアスリートが、なぜそ れでも競技を継続し、そこに自己を投企するのかという論理を、社会学的ライフストーリー分析を用いて接近する点に独創性がある。

4. 研究成果

まずボクサー性向に関して、本研究ではふたつの重要な論点に行き着いた。第一に、ボクサーは自らが望むようには試合を実施できない点である。第二に、試合決定過程からボクサーは完全に除外されており、彼らには無声化が強いられる点である。

一方、ボクシングマーケットの編成原理については、ボクサーが四つのカテゴリーを鋳型として生産される点が浮かび上がった。よってボクシング界では、チャンピオンだけではなく、そのチャンピオンを構造的に下支えするジャーニーマンや滞留ボクサー、そのさらに底部に位置づくノービスボクサーも生産されるのである。さらに、この四つのカテゴリー化とボクサーの絶対数不足との亀裂を補修する営為として、1 同国内の一〇ラウンダーはライバルであると同時に相互に存在を必要とするパートナーでもあること、2 海外からの「咬ませ犬」を恒常的に必要とすることを論じた(敗者の生産)。

これらふたつの視角から導かれた諸論点は、ボクシング界を貫く原理は社会的選別であることだ。たしかにキャリア初期の段階より育成法には相違があり、その条件に恵まれたボクサーとそうでないボクサーの間には条件的不平等がある。しかし、タイトル奪取に失敗したボクサーはその後トップファイターとして生き残ることは不可能となり、ジャーニーマンとして生きるほかなくなる。一定の条件的不平等はありつつも最終的にはリング上で勝利を収め続けた者がボクサー全体数からみれば一握りのトップファイターを占め、あとはそれ以下の存在としてふるい分けられるわけである。強い者、勝利を収めた者がボクシングヒエラルキーを上昇し、そうではない者は上昇ルートからは蹴り落とされる。この点において、ここにあるのは社会的選別であるということができる。

しかしながら、ボクシングにおける社会的選別には固有の仕掛けがあることを付け加える必要がある。それは上昇ルートから蹴り落とされたボクサーは、すぐにこの世界からの撤退を余儀なくさせられるのではなく、選別された者に見合った持ち場が割りあてられることである。トップファイターとして成長できなくともジャーニーマンとして、ジャーニーマンとしては限界がありつつも滞留ボクサーとして、自らの持ち場を変化させながら彼らはボクサーとして生きるのである。

もちろんこのように持ち場を変えてボクサーとして存在し続けることができるのは一〇ラウンダーに限定されており、この仕掛けは数多のノービスボクサーまでを包摂するわけではない。けれども、ある特定層のボクサーたちが社会的選別を受けつつもボクシング界に留まり続けることが可能となる仕掛けがあることをここでは押さえておきたい。

だがここで再度私たちが突き当たるのは、シスノリオのライフストーリーである。ボクシング界における持ち場の提供というこの仕掛けこそが、彼を滞留ボクサーとして形成し、その結果夭逝を導いたではないかということだ。滞留ボクサーという彼の持ち場は、彼が主体的に選び取ったものではなく、ボクシングマーケットの力学が彼に選び取らせたものであること、より具体的に主体を名指せば彼のマネージャやタイのプロモーターの行為の結果ではないかという点である。ここにおいてマッチメイク過程におけるマネージャの代行主義とその結実としてのボクサーの無声化という点が深く関わる。社会的選別と選別された者の再包摂。このプロセスにボクサーの無声化が介在することで、ボクシングマーケットの全体が安定化される。このようにみてくると、ボクサーの無声化がボクシングマーケットの安定を根本的に支えている状況が視野に入ってくる。そして事態が複雑なのは、ボクサー自身がこの無声化に手を貸している点である。試合を待ちわびるボクサーの姿を思い起こす必要がある。四つのカテゴリーに準拠してマッチメイクがおこなわれることに対する不満はある。だがそれでも試合出場を願い、そのマッチメイクで試合をすることを自己承認するボクサーの心意もまた、本研究で捉えたものである。

まとめるなら、試合出場を悲願とするボクサーの心意とマネージャの代行主義とボクシングマーケットの社会的選別原理が一体となってボクシング試合は存立しているといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① Tomonori Ishioka, 2013, Boxing, Poverty, Foreseeability: An ethnographic account of local boxers in Metro Manila, Philippines, *Asia Pacific Journal of Sport and Social Science* 1-2. 査読有

②石岡丈昇、2012、「書評に応えて:石岡丈昇『ローカルボクサーと貧困世界』」『ソシオロジ』第 175 号、pp. 118-122 査読無

③石岡丈昇、2012、「現代マニラにおける仕事と時間」『遊ぶ・学ぶ・働く――持続可能な発達の支援のために:シンポジウム報告書』北海道大学大学院教育学研究院子ども発達臨床研究センター、pp. 73-80 査読無

④石岡丈昇、2011、「高橋豪仁『スポーツ応援文化の社会学』」、日本スポーツ社会学会『スポーツ社会学研究』第 19-2 号、pp. 85-88 査読無

⑤石岡丈昇、2011、「対象化された貧困――マニラのボクシングジムの存立機制」、『理論と動態』第 4 号、pp. 42-58 査読有

⑥石岡丈昇、2010、「チャンピオンスポーツの光と影――常態としての『敗者の生産』」『体育の科学』第 60 号、pp. 323-327 査読無

〔学会発表〕（計２件）
①石岡丈昇、「ボクシング・貧困・時間的予見―マニラの事例から」『日本スポーツ社会学会』第 21 回大会シンポジウム報告、熊本大学、2012 年 3 月 19 日

②石岡丈昇、「テンポの受肉――〈集団競技〉としてのボクシング」『日本スポーツ社会学会』第 20 回大会一般報告、成蹊大学、2011 年 6 月 25 日

〔図書〕（計２件）
①石岡丈昇、2012、『ローカルボクサーと貧困世界--マニラのボクシングジムにみる身体文化』世界思想社

②石岡丈昇、2011、「質的調査法（フィールドワーク）」井上俊・菊幸一編『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房、pp. 190-191

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　石岡丈昇（ISHIOKA TOMONORI）
　北海道大学・大学院教育学研究院・助教
　研究者番号：10515472

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：